

プリム通信

きょうかいねんかん 教会 年間テーマ～主に愛された者から主を愛する者へ「私は主を愛する」～

2026 | ペンテコステ | No.8

ショートメッセージ「聖霊なる神」

「求めよ。さらば与えられん。」—この聖句は、イエス様が弟子たちに向かって語られた垂訓の中でも、特に有名な一節かと思えます。この意味するところを、今流行りのAIに聞いてみると、「祈り求める者には、神は良いものを与えてくださるといふ信者の教えであり、転じて、能動的な姿勢が良い成果を生む教訓」と、非常に分かりやすく簡潔にまとめてくれました。

さすがAIだわ、と感心すると同時に私は、やはりAIだ、とも思いました。それはこの解答が、このみことばを語られたイエス様の真意（みこころ）にまで言及されていなかったからです。聖書を開くと、この聖句はマタイとルカの二つの福音書に記されています。マタイのほうでは、「求めなさい。...天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう」とあり、AIのまとめと全く相違ないように感じます。しかし、ルカも合わせて聞いてみると、「求めなさい。...天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう。」と、その良いものが具体的に何であるのか、イエス様がはっきりと述べてくださっているのです。

私たちがこの世界で熱心に探し求め、どうしても手に入れなければならないもの...それは物質的な豊かさや名誉など、一時的な心の満たしになるものではなく、神が与えてくださる聖霊であり、それこそが私たち人間にとって最も素晴らしい賜物（プレゼント）なのだ。

では一体、この聖霊とはなんでしょう。洋画ではよく、カトリック教会の神父が胸の前で十字を切りながら「父と子と聖霊の御名によって」と祈る場面が登場しますね。一方、私たちの教会は、「イエス様の御名によって」と祈ります。つまり、この天地万物を創造された父なる神、人間の姿でお生まれになった子なる神、そしてさらに聖霊なる神が、同じお一人の神であるということです。

この聖霊の働きについてイエス様は「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。...わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻ってくるのです。」<ヨハネの福音書14章16・18節>と語られました。

聖書は、聖霊の働きを「風」や「声」に例えます。目に見えなくとも確かに私たちの背中を押す力強い風のように、聖霊は日々私たちを助けてくださいます。そして、目に見えない人の存在を確かなものとする声のように、聖霊は日々私たちにイエス様のみことばを思い起こさせ、歩むべき道を示してくださるお方です。

この聖霊様の助けと導きによって、弱い私たちが確かに天の御国に帰り着くことができるのです。聖書にこう書いてあります。「またあなたがたも、キリストにあつて、真理のことば、すなわちあなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことによって、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証であります。」<エペソ人への手紙1章13～14節>

十字架によって全人類の罪を贖い、三日目に死を打ち破って復活なさったイエス様は、40日もの間、弟子たちにご自身を現わしてくださいました。そして、天に昇られるまで弟子たちに語られたのは、この父なる神の約束して下さった聖霊を待ち望むようにということ、聖霊と共に生きることこそが神の国の到来なのだということでした。その命令を信じ祈り続けた弟子たちの上に、ついに天から聖霊が来てくださったのが、イエス様の復活から数えて50日目の朝のことでした。くしくもこの日は、ユダヤ三大祭りの一つ「五旬節」だったので、キリスト教会はこの聖霊降臨の祝いを「ペンテコステ」（ギリシャ語で50の意）と呼ぶようになりました。

クリスマスや復活祭は、二千年前の出来事を記念して思い起こすお祝いです。しかしペンテコステは、今を生きる私たちが当時の弟子たちと全く同じように体験することができるお祝いです。聖霊様のすばらしさをもっと詳しくお知りになりたい方は、ぜひまず、オリーブの木キリスト教会の扉をたたいてくださいね。お待ちしております。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。
 たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、
 たたく者には開かれます。＜マタイの福音書7章7～8節＞



さんび しゆ
私の賛美、主への賛美

とうだいもり
vol.1 灯台守



F姉が、イエス様を信じて洗礼に導かれたのは、昨年の3月、御年97歳でのことでした。体の自由がなくなり、眠っている時間が増えたF姉がある日、昔歌ったある曲が最近耳元でしきりに聞こえること、それが賛美歌のような気がする、という話をしてくれました。F姉から聞き取れた歌の一部分を頼りに調べてみると、それが「灯台守」という昭和の学校唱歌であることが分かりました。そしてその原曲が、賛美歌とされているということも、確かにクリスマスの聖歌「ふけゆく野原の」と音の運びが非常によく似ています。また、この曲に「灯台守」と題して歌詞をつけたのは日本人だったのですが、その内容はとても味わい深く、それはまさに、F姉の生涯を通して現わされた主イエス様の愛を思わせるものでした。

天の御国、そこは、ただ永遠に主を賛美するところ——

灯台の光は、闇の中の、道なき海を行く船に、進むべき方向を示してくれるものです。船乗りにとって、その光はいのちそのものですが、昔の灯台には、その光が消えたりしないよう日夜を問わず働いていた灯台守がいたのです。F姉が教会にたどり着いたのはその長い人生がいよいよ終わりに近づいた時でした。しかし、ついにイエス様と出会った時、F姉は気付いたはずでした。生まれた時からどんな時もずっと、イエス様がF姉を守り導いてくださっていたのだと。この曲を賛美として歌えるよう少しだけ歌詞をアレンジして、私たちの教会の賛美リストに加えました。その直後の先月30日、F姉は98歳で、平安のうちに天に召されていきました。なぜか耳元でこの賛美が聞こえたのは、天に帰る準備の一つだったのでしょうか。この「灯台守」は、F姉が私たちに残してくれた大きな恵みとして、これからも歌い続けていきます。またF姉と一緒に、天で主を賛美する日まで——

病床やご高齢で教会に足を運ぶことが難しい場合、お呼びいただければ、牧師がどこへでも祈りにお伺いします



教会HPはこちら <https://olivetree-christchurch.com>

こお つきかげ そら さ
 凍れる月影 空に冴えて
 まふゆ あらなみ よ おしま
 真冬の荒波 寄る小島
 おも
 思えよ灯台 その光は
 とうと やさ
 尊き優しき 神の愛よ

